を意識し、それに倣った構成にしつつも、「誄」ではなく、「誄」に代わる「五言古詩」のスタイルにしたのかということである。

私論だが、それは道真自身が、この「五言古詩」こそが、我が心情を吐露できる最も意を得た作詩スタイルであると考えていたからではないかと考える。その根拠は以下のようなものである。

井上氏が言及するように、「誄」ならば、「四字句」を押韻する「頌」で綴るのが通例であったこと。又、「嗚呼哀哉」という四字の哀悼の定型句を用いなければならないという制約があるのに比して、古詩にはそうした制約が全くない点、そして何よりも「五言古詩」へのこだわりが道真自身にあったことを物語っていると考える。それは、筆者が、百韻という大作「敍意一百韻」が五言排律であったこと。そして、この大作のあとにこの「哭奥州藤使君」が詠まれたと考えるからである。つまり、「敍意一百韻」と「哭奥州藤使君」は当時の道真の心情を窺える「表裏一体」の大作ではないかと分析しているからである。

（注一）　「哭奥州藤使君」他一編（『菅家後集』）全注釈（二）
焼山廣志監修「道真梅の会」篇　大洋印刷　平成二十五年一月

（注二）　菅原道真研究―『菅家後集』全注釈（二十五）
国語国文学研究（熊本大学　文学部）第四十八号　平成二十五年二月